



リトルノリス山豆 A2

蕎麦町春彦



リトルプレス小豆A2

茜町春彦

目次：

- 英訳昔話「牛方と山姥」
- 推理エッセイ「褒那之阿餓利」
- 考察エッセイ「頂きます考」
- 企画エッセイ「3Dプリンターの使い道」

序

一つの絵本と、三つのエッセイを収録しています。

概要を以下に述べます。

英訳昔話「牛方と山姥」について：

柳田国男著『日本の昔話』の中の一編です。牛方が塩鯖を運搬している時に山姥と遭遇して大変なことになる、と云うストーリーを18枚のイラストレーションにしました。

本文は漢文書き下し文に模して書き直しております。英訳も行いました。

推理エッセイ「褒那之阿餓利」について：

日本書紀の仲哀天皇紀の9年2月5日の条に示されている「褒那之阿餓利」の意味を推理してみました。

考察エッセイ「頂きます考」について：

食事の際にいう「頂きます」を、なぜ「いのちをいただく」と称するようになったのか？

考えてみました。

企画エッセイ「3Dプリンターの使い道」について：

個人で所有した場合、3Dプリンターに多少なりとも使い道はあるのか？

考えてみました。



英訳昔話「牛方と山姥」

絵・文・訳：茜町春彦

原作：柳田国男

概要：

絵本です。原作は日本の昔話（新潮文庫）の中の一編です。

日本の昔話：

著者は柳田国男（1962年没）です。柳田国男氏自身が述べているように『日本の昔話』は全国から集めた話なので、創作性の観点から著作権は元々発生していないと思いますが、仮に著作権が発生していたとしても柳田国男氏の没後50年を経過していますので既に消滅しています。

(著作権：消滅)



昔々ある一人の牛方が、沢山の塩鯖を牛の背に積んで山の在所へ売りに行く途中・・・

Long long ago, an Ox Driver was going to a countryside beyond hills for selling a lot of salted mackerel.

The mackerel had been packed on his ox.



・・・高い大きな峠を越えようとする時に、運悪く山姥に行き逢いました。

On the way, the Ox Driver was about to cross a high mountain pass.

Then, he unfortunately encountered an Ogress.



牛方牛方、鯖を一尾くれと言います。

仕方がないから荷の中から鯖を一つ抜いて、投げて遣って急いで通りましたが、牛が遅いのですぐその鯖を食べてしまって、また後から追いついてねだりました。

"Hey, Ox Driver! Give me mackerel," the Ogress said.

As there was no choice, the Ox Driver drew out one of mackerel from the load and threw it to her.

He passed by her in a hurry.

As his ox was slow, she finished eating the fish instantly.

The Ogress came up with him and importuned for another.



こうして一尾ずつ抜き出しては投げて遣っているうち、とうとう牛に付けていた沢山の塩鯖は残らず山姥に食べられてしまいました。

Like this, the Ox Driver drew and threw one after another.

The Ogress ate up all of mackerel packed on the ox in the end.



鯖がなくなるとその次には牛を食わせろ、食わせないとお前を食うぞと言いました。

No mackerel was left.

"Give me the ox, or I will eat you," the Ogress said.



恐ろしくてたまらぬから、牛をそこに置いて急いで逃げて来ますと、それも瞬くうちにめりめりと食べてしまって又追っかけて来て、今度は貴様を取って食うと言いました。

これだけは承知をするわけにはいきません。

The Ox Driver could not withstand the fearfulness.

So, he left the ox there and ran away in a hurry.

The Ogress crunched it in an instant.

And she came up with him again and said "I eat you next."

This is never acceptable.



一生懸命に走って逃げて、大きな池の堤まで来ました。

堤の上には大きな木がありました。

急いでその木に登って隠れようとしたのですが、あいにく下の方には葉がないので、牛方の影が沼の水に映りました。

山姥は息を切って飛んできましたが・・・

The Ox Driver ran away for his life and came to the bank of a big pond.

There was a big tree on the bank.

He climbed the tree in a hurry and tried to hide himself.

But the tree had no leaves at the lower part.

So, his shadow was reflected in the water surface of the pond.

The Ogress came running breathlessly.



あわてて沼の中の影を牛方かと思って水に入って方々を捜しまわりました。

その暇に漸くのことで木から降りて来て、牛方は又走って逃げました。

The Ogress took the shadow in the pond to be the Ox Driver.

And she went into the water hastily and searched him around.

For this chance, the Ox Driver climbed down from the tree and ran away again.

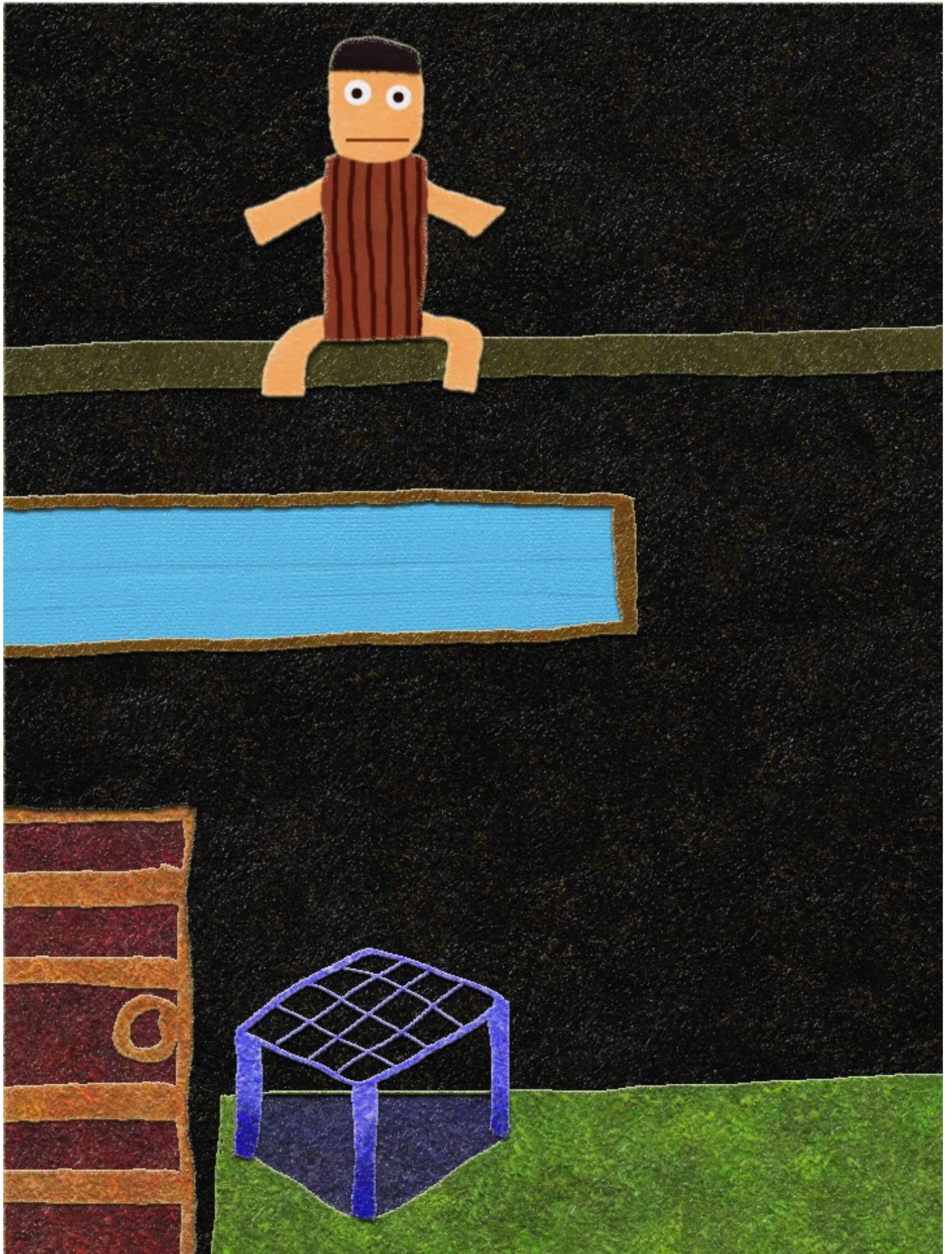


そうすると山の下に一軒の家があるので、急いで中に入ると、それがまた今の山姥の住み家でありました。

There was a house at the foot of the hill.

The Ox Driver went into the house in a hurry.

It was the residence of the Ogress.



そっと天井に上って梁の間に隠れておりますと . . .

The Ox Driver stealthily went up to the ceiling and hid himself among beams.



やがて山姥は沼から出て、今日は牛方に構っていて、エラクくたびれたと、独りごとを言いながら帰って来ました。

After a while, the Ogress got out of the pond.

And she returned to her house.

She talked to herself.

"I spent much time for the ox driver today. So, I'm very tired."



そうして囲炉裏に火を焚いて、また餅を出して来て焼き始めました。

餅が段々焼けて来るうちに、山姥はこくりこくりと居眠りをしています。

梁の上に隠れている牛方は、屋根の裏から茅の棒を一本抜いて、焼けた餅をひとつずつ突き刺して取って食べました。

The Ogress kindled a fire on the hearth.

And she fetched rice cakes and started to bake them.

The rice cakes were baking gradually.

The Ogress dozed off.

The Ox Driver was hiding on a beam.

And he drew a reed out of the thatched roof.

And he stabbed the baked rice cakes and ate them one after another.



姥が目を覚まして誰が取ったと怒鳴ると、小さな声で火の神火の神と言いました。

山姥は一切れの餅が渡し金から転げて真黒に焦げているのを拾って、火の神様なら仕方がないと言いました。

The Ogress woke up and shouted.

"Who took them!?"

"The god of fire took them," the Ox Driver whispered.

There remained a rice cake, which had fallen from the grill and burned black.

The Ogress picked it up.

And she said, "The god of fire took them. There's nothing I can do about it."



それから今度は鍋を掛けて、また甘酒を沸かします。

そうしてその甘酒の温まるのを待っていて、また居眠りを始めましたから、牛方は長い茅の棒をもう一本抜き出して、梁の上から甘酒を吸ってしまいました。

Next, the Ogress put a pan on the fire.

And she warmed up a sweet beverage.

Then, she waited for the sweet beverage to warm.

And again, she started to doze off.

So, the Ox Driver drew out another long reed.

And he sucked the sweet beverage from on the beam.



山姥が目を覚まして、誰が飲んだと怒鳴ると、牛方は又小さな声で火の神火の神と言いました。

The Ogress woke up and shouted.

"Who drank!?"

The Ox Driver whispered.

"The god of fire drank it."



こんな晩には寝たほうが良い。

石の唐櫃にしようか、木のカラトにしようか。

石は冷たい、木のカラトが良からうと言って、大きな木の唐櫃の蓋を開けて、その中に入ってグウグウと鼾をかいて寝てしまいました。

She said:

I had better go to bed for this evening;

Shoud I sleep in the stone container or in the wood container?

Stone is cold;

The wood container is better.

Then, the Ogress opened the big wood container.

And she entered therein and fell asleep with a snore.



牛方はその様子を見ていて、そっと梁の上から降りて来て、囲炉裏の火を焚きました。

そうして湯をグラグラと沸かして置いて、錐を持って来て木のカラトの蓋に穴をあけました。

唐櫃の中の山姥は、その音を聞きながら、明日は天気だけで、きりきり虫が鳴かあやと言っていました。 . . .

The Ox Driver was watching this situation.

He came down quietly from the beam.

And he kindled a fire on the hearth and boiled water up.

Then, he fetched an auger and made a hole in the lid of the wood container.

The Ogress in the container was listening to the sound.

"Tomorrow will be fine. And so, a cricket is chirping," she said.



・・・そのうち熱い湯をその穴から注ぎ込まれて、とうとう牛方に仇を打たれてしまいました。
(越後)

Soon, the boiled water was poured through the hole.

The Ogress was revenged and ended by the Ox Driver.

(Echigo province)



推理エッセイ「褒那之阿餓利」

著者：茜町春彦

概要：

日本書紀の仲哀天皇紀、9年2月5日条にある「褒那之阿餓利（无火殞斂）」について考えてみました。

推理エッセイ「褒那之阿餓利」

日本書紀の仲哀天皇紀、9年2月5日条にある「褒那之阿餓利（无火殯斂）」について考えてみました。

この部分の原文を引用しますと、

- 而殯于豊浦宮為无火殯斂

ですが、これを読み下すと、

- 而して豊浦宮に殯り、褒那之阿餓利を為す

となります。

この「褒那之阿餓利」を「ほなしあかり」と訓じて、「火無し灯」と解して、『灯』から『火』偏を『無くす』と『丁』が残ります。よって、「褒那之阿餓利」は「丁（ひのと）」を意味すると推理します。

ここで「餓」を清音で読んだのは、やや強引かもしれませんが。

また「褒那之阿餓利」と「2月5日（丁未）」に起きた事に関係があるのか？無いのか、と云うことに関しては別途機会があれば考えてみたいと思っております。



考察エッセイ「頂きます考」

著者：茜町春彦

概要：

食事のときに言う「頂きます」について考えてみました。

考察エッセイ「頂きます考」

食事をする時に言う「いただきます」の意味は「無料でもらう」です。

この意味を「（命を）いただきます」と解釈しようとすることに就いて考えてみます。

日本に於いて長い間、家父長制度がありました。最近まであったと思います、事によれば今でもあるかもしれません。家長の稼いだ金で用意した食事を妻子は金を払わないで食べるのだから、家長に対して「（無料で食べさせて）いただきます」という訳ですが、戦後ずいぶん時間が経ち人々の平等意識も高まり、家事も労働であると認識するようになり、核家族化も進み、パートやバイトも普通にあり、職業婦人も一般化した現代で、何故たかが夫如きに「（無料で食べさせて）いただきます」と一々言う必要があるのか、と云う疑問が発生したのだと思います。

そして、その疑問を解消する為に、たぶん任侠映画か何かで聞いた「御命頂戴」を誰かが逆方向の類推により「（命を）いただきます」と云う解釈に結び付けたのだと思います。水や白湯を「いただく」とときには、どのように解釈すべきかと考えると、「（命を）いただきます」と解釈するのは納得できません。

例えば「一緒に食べましょう」と言うことも可能なはずなので、解釈を変更するのではなく、新しい時代の言葉を見つける必要があると考察します。



企画エッセイ「3Dプリンターの使い道」

著者：茜町春彦

概要：

3Dプリンターを個人で所有した場合、何の目的に使う事が出来るか、考えてみました。

ただし、この企画はアイデアの範疇を出るものではありません。3Dプリンターを所有しておらず試作すら行なっておりません。

企画エッセイ「3Dプリンターの使い道」

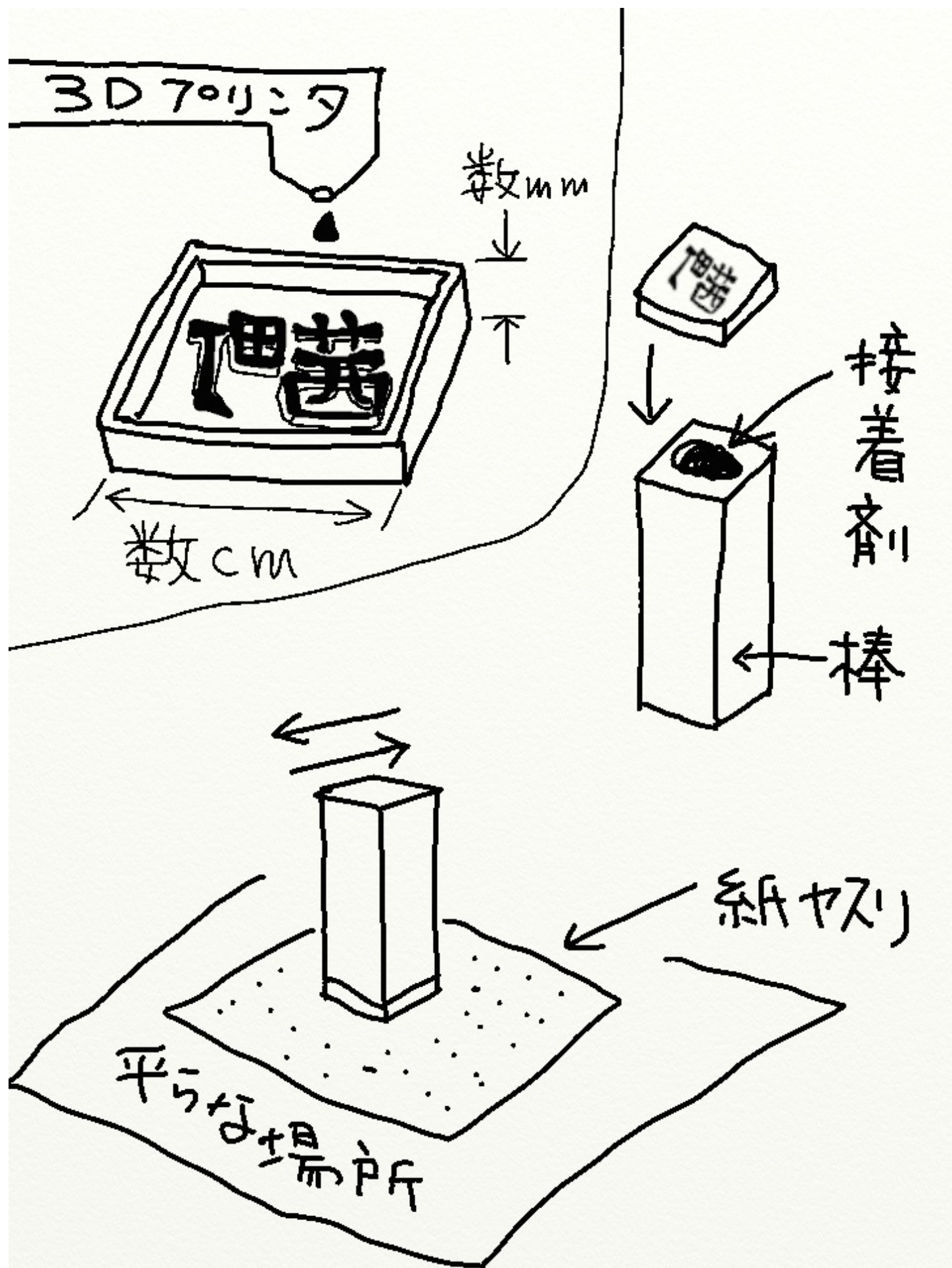
絵手紙や書道作品に使用するために、篆刻印風の印面部分を3Dプリンターで成型して、それを棒状のものに接着して印鑑を自作する企画です。（参考図を次ページに示しています）

費用・時間に制限がなければ棒状部分を含めた一体成型も可能だと思います。

プリンターの精度によっては印面を紙やすり等で平らにする必要があるかもしれません。

また以下のような物も成形できるのではないかと考えています。

- スマホ・カバー
- 将棋の駒
- 箸置き（食品衛生法上問題がなければ）



後書き

参考文献：

日本の昔話：平成17年10月25日36刷

（柳田国男著、新潮文庫）

漢文法基礎 本当にわかる漢文入門：2010年12月13日第4刷発行

（加地伸行著、講談社学術文庫）

ジーニアス英和辞典〈改訂版〉2色刷り：1994年4月1日改訂版初版発行

（株式会社大修館書店）

新コンサイス和英辞典〈革装〉第3刷：昭和50年9月15日第1刷発行

（株式会社三省堂）

実例英文法〈第4版〉：昭和63年6月第1刷発行

（AJ.トムソン・AV.マーティネット共著、江川泰一郎訳、オックスフォード大学出版局）

Longman Dictionary of American English:First printing 1983

(Longman Inc.)

日本書紀（上）現代語訳：2007年12月3日第43刷発行

（宇治谷孟著、講談社学術文庫）

日本書紀上 日本古典文学大系67：1986年8月8日第21刷発行

（坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注、株式会社岩波書店）

角川漢和中辞典：1995年11月20日235版発行

（株式会社角川書店）

大漢語林：平成4年4月25日初版発行

（株式会社大修館書店）

字統：1985年1月7日初版第8刷発行

（株式会社平凡社）

古代国語の音韻に就いて 他二篇：2011年11月10日第32刷発行

（橋本進吉著、岩波文庫）

レトリックのすすめ：2009年9月1日初版第2刷

（野内良三著、株式会社大修館書店）

CG画像：

次の画像処理ソフトウェアを使用しました。

ArtRage 3 Studio Pro（アンビエント社）

Photoshop Elements 10（アドビシステムズ株式会社）

著者：

茜町春彦（あかねまちはるひこ）と申します。

2004年より活動を始めたフリーランスのライター&イラストレーターです。作品が社会の進歩に多少なりとも寄与することを願いながら、日々制作を行なっています。

その他：

製品名等はメーカー等の登録商標等です。

本書は著作権法により保護されています。

2013年9月26日発行

2015年10月1日改訂

2019年6月27日改訂2版

リトルプレス小豆A2

<http://p.booklog.jp/book/77237>

著者：茜町春彦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akaneharu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77237>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77237>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ